

もくじ

資料紹介 将軍家御膳所絵図… P1 明治九年御巡幸御用扣(下)… P3

足立史談

第702号

2026年8月15日

足立区立郷土博物館内

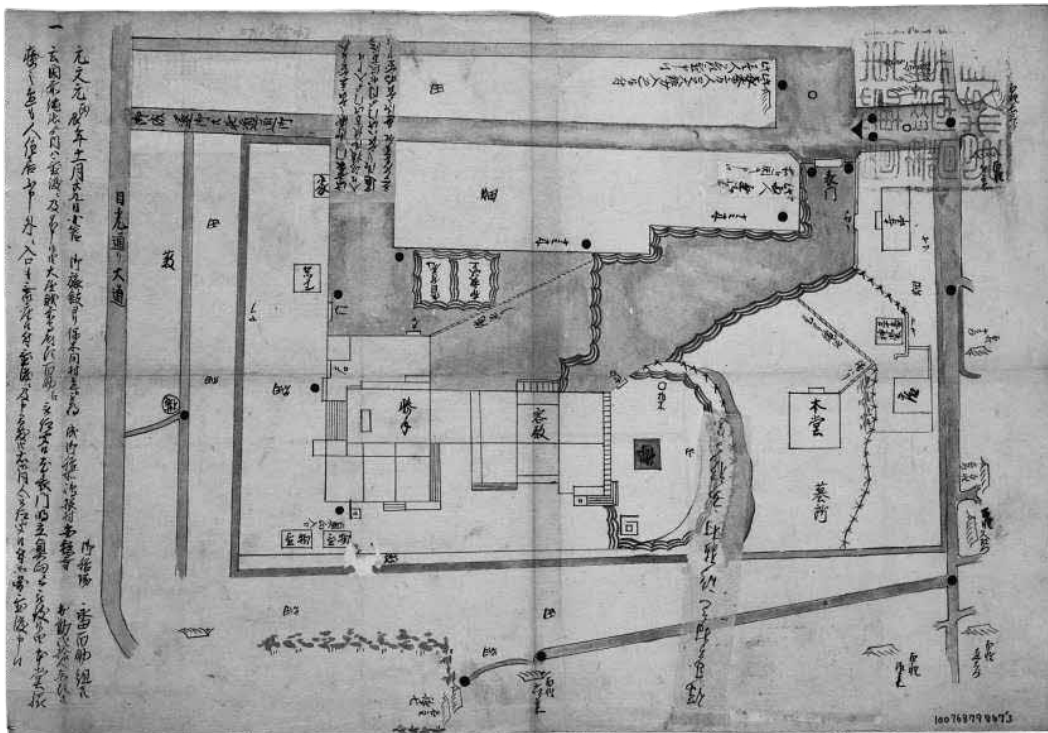
足立史談編集局

〒120-0001

東京都足立区大谷田5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562



【図1】「嶋根村安穩寺図」

将軍家御成の警備配置図
筑波大学附属図書館蔵

資料紹介 将軍家御膳所絵図

國土安穩寺と明王院

郷土博物館

1 随行者と対応

■御成の行列 将軍家の御成というとき、将軍や世嗣が数名の供を従えて移動する姿を思い浮かべるかもしれません。しかし、当時の記録や浮世絵を見ると、実際にはおよそ一〇〇人規模の「行列」を編成して行動していました。その規模は、二万〜三万石級の大名行列に匹敵し、将軍の外出がいかに大掛かりなものであったかがわかります。

江戸時代の足立区は、領主でもあった徳川将軍家の御成先（おなりさき）。将軍や世嗣が出向く場所）の一つでした。昔話や区の歴史に関する刊行物にもたびたび登場するため、ご存じの方も多いことでしょう。

将軍や世嗣が食事や休憩をとる場所には、「御膳所」や「御小休所」が設けられ、多くの場合、寺院や大きな屋敷がその役割を担いました。当時の将軍家御成の実態を知ることができ、貴重な史料が「御膳所絵図」です。

ここでは、筑波大学附属図書館が所蔵する御膳所絵図の中から、足立区域にあった二つの寺院、上掲の國土安穩寺（島根）と、次頁に掲載した明王院（梅田）の絵図を紹介しします。

2 國土安穩寺

島根四丁目の國土安穩寺は、将軍家の御膳所にふさわしく、寺紋に葵紋を用いています。上の絵図は、元文元年（一七三六）十一月二十九日に、世継ぎの徳川家重（のちの九代将軍）が訪れた際の御膳所の様子で、南を上にして描かれています。この日、家重は小菅御殿を出発し、中川沿いを巡行し保木間あたりを経て、國土安穩寺を御膳所としました（『徳川実紀』）。

■当日の記事 当日の行動について記されており、「御膳場の永田百助組といっしょに小菅御殿から保木間村あたり迄、御成になった。御膳所は嶋根村の安穩寺である。」と記され、さらに

■迎える側の役割 一方、将軍を迎える御膳所や近隣の町村でも、万全の受け入れ体制が整えられました。陣幕を張って御成の空間を設けるほか、到着する幕臣や警備の役人への対応にも追われました。

また、御成は地域の農作業にも大きな影響を及ぼしました。足立区域は水田地帯でしたが、御成、とりわけ鷹狩りが行われる冬には、狩り場とするために田の水を完全に落とす「田さくり」が実施されました（『葵の御威光』当館、二〇〇六年）。

このように、将軍の御成は地域の人々の暮らしや農作業にも深く関わる一大行事だったのです。

寺社奉行だった大岡忠相が縄張りなどを差配していることが記されています。

■御膳所の設備と警備 絵図には、本堂の左側に家重の御座所が設けられ、「御」の字で示されています。御座所は、三日月形の水路に沿って設けられた竹矢来(×印)と陣幕に囲まれ、厳重に区画されていました。

また、絵図中の●印は、警備役人の配置場所を示しています。

さらに、客殿の上方には、「目付衆」や「布衣(ほい)以上」ら旗本たちが控える場所も描かれており、御成に際して幕府の役人が厳格な警備と儀礼の運営にあたっていた様子が判ります。

■関係する嶋根村の家々 絵図には、周辺の嶋根村の家々も描かれています。右上には名主・金蔵、下中央付近には名主・孫七の家が記されており、当時の嶋根村には二人の名主が置かれていたことがうかがえます。

また、右上に描かれた当時の寺の表門の外にある家にも●印が付されています。この場所には、「この家は御茶を担当する家であり、人足が大勢出入りするため、ここにも警備を置く」との注記があり、人や物資の往来が多いことから、警備が強化されていたことがわかります。

このように絵図からは、御成が寺院だけでなく、嶋根村の名主や御茶を担当する家など、地域の人々の協力によ

って支えられていた様子を知ることができます。

この日の家重の来訪については、國土安穩寺の縁起にも記されており、とくに「將軍が魚取りを楽しんだ」という伝説として、加藤敏夫編『足立百の語り伝え』(足立区、一九八六年)にも収録されています。

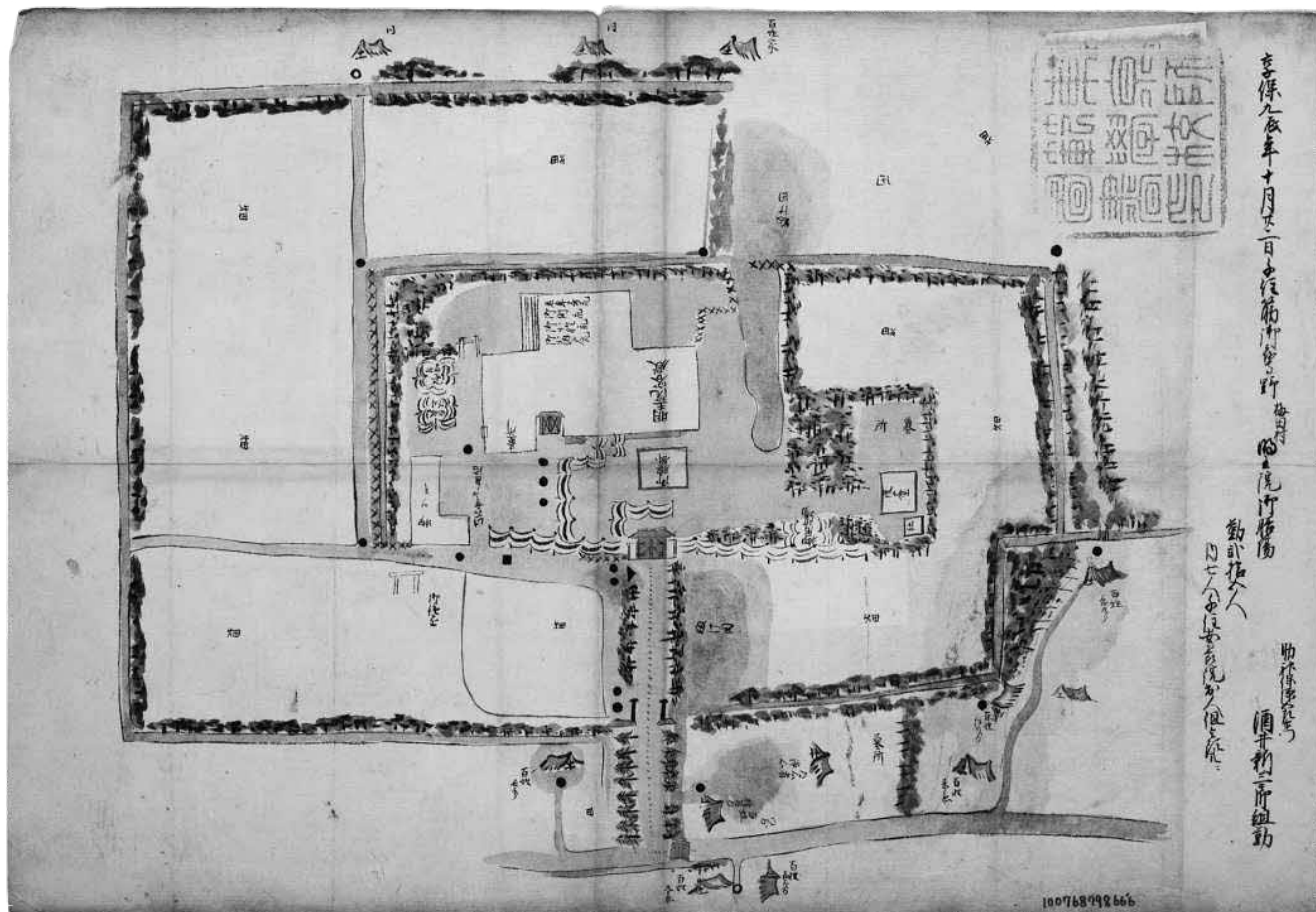
この絵図は、縁起や地域に伝わる伝説の背景となった家重来訪の様子を伝える史料としても貴重であり、当時の出来事を具体的に知ることができる価値の高い資料といえるでしょう。

3 梅田の明王院

梅田四丁目の明王院は、源氏伝説でも知られた名刹ですが、ここも御膳所として知られていました。下段に掲載した絵図は享保九年(一七二四)十月二十二日に八代將軍徳川吉宗が御膳所として利用したときの絵図です(本絵図は北が上に描かれています)。

■梅田村の家々と土地 國土安穩寺の絵図と同様に、この絵図にも地元・梅田村の関係する家々が描かれています。その中には、「道心者」と記された家も見られます。道心者とは、半僧半俗の在家信者で、寺院に仕えながら仏道に携わる人々のことです。

また、寺の南北には水路につながる「ふけ田」が描かれています。これは「深田」とも呼ばれる湿田を意味し、水をたたえ、水分を多く含む田を指し



【図2】梅田村明王院図 筑波大学附属図書館蔵 参道と山門の上に徳川吉宗の御座所がみえる。

ます。足立区周辺は古くから湧水に恵まれた地域として知られており（西新井の名水井戸など）、この「ふけ田」もそうした豊かな水環境を反映した景觀の一つであったと考えられます。

■幕閣の同行 もう一つの特徴は、随行者の顔ぶれです。絵図には警備の人数が記されるだけでなく、明王院の本堂とみられる建物内に「若年寄衆」「御側衆」「御小姓衆」「御小納戸衆」といった幕閣や側近たちの控所が記されています。このほか、國土安穩寺の絵図と同様に、旗本たちの「目付衆」や「布衣以上」待機場所も設けられていました。將軍側近の幕閣まで随行していることから、吉宗の明王院への御成が、國土安穩寺への御成以上に大規模であったことがうかがえます。

■水路と並木がめぐる外郭 明王院の絵図では、吉宗の御座所は本堂前に設けられています。また、寺の外郭のさらに外側には、並木と水路がめぐる二重の線が描かれています。これは、いわば明王院の「外堀」のような役割を果たすもので、出入口には、やはり●印で示された警備役人が配置されていました。寺院は時に城郭のような防衛機能を備えることがあったといわれますが、この絵図はそのような性格を思わせる構造をよく伝えています。

4 御膳所の警備機能

二つの絵図を御覧いただくと、いず

れも警備に重点が置かれていることがわかります。寺院内には、おわかりいただけると思います。寺院でありながら、その構えは砦や城郭を思わせるほど厳重です。

徳川將軍家は当時の政治の頂点であり、その動静は幕府にとって最重要事項でした。そのため、將軍が立ち寄る御膳所には、警備に適した施設であることが求められたのは当然のことといえます。足立区域には、このほかにも西新井の總持寺（西新井大師）や千住の勝専寺（赤門寺）などが御膳所に指定されましたが、これらの寺院も同様の警備機能を備えていたからこそ、御膳所として選ばれたのでしょう。

* * *

以上、二つの御膳所図を御紹介しました。いずれの絵図にも右上に「東京師範学校図書印」が押されており、これらの資料は東京師範学校から東京教育大学を経て、現在は筑波大学に受け継がれていることがわかります。

また現在、筑波大学附属図書館のデジタルアーカイブで公開されています。附属図書館の検索画面で「安穩寺」または「梅田村明王院」と検索すると、どなたでも閲覧することができます。

【八月三〇日まで写真パネル公開中】

博物館で開催中の「収蔵資料展」で本資料をパネルで紹介しています。徳川將軍家ゆかりの資料とあわせて、ぜひご覧ください。

（文Ⅱ学芸員 多田文夫）

【新収蔵史料紹介】

大久保家文書

明治九年御巡幸御用扣（下）

大石 瑞 樹

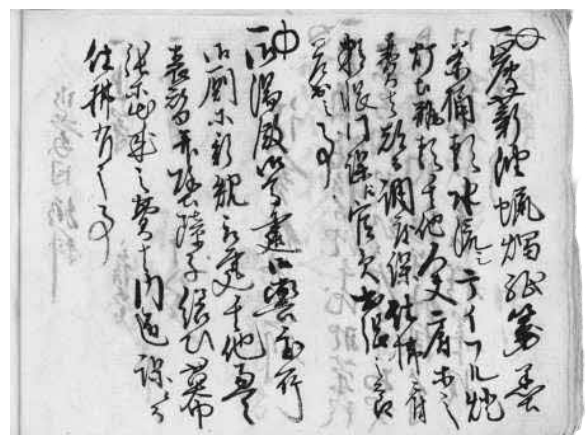
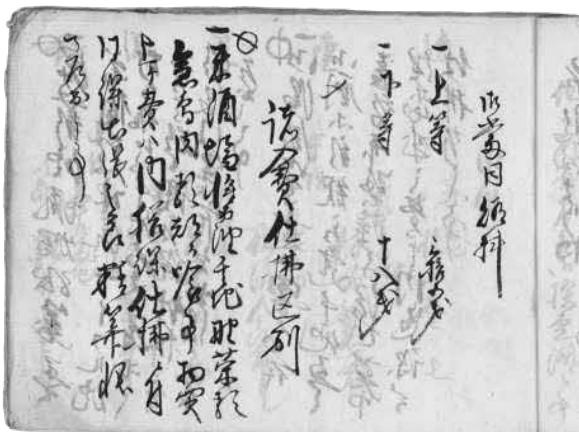
これまで、第六九九号（令和八年五月刊行）、第七〇一号（令和八年七月刊行）で「御巡幸御用扣」を紹介してきました。

最終回となる今回は、巡幸当日までの記述から、準備の過程について解説します。

■当日の賄料と費用支払いの区別

はじめに、巡幸日当日の賄料や費用の請求先についてまとめた史料をみていきたいと思います。

【御巡幸御用扣 十二丁目写真】



【御巡幸御用扣 該当部分翻刻】

御当日賄料

- 一、上等 三拾五銭
- 二、下等 十八銭

諸入費仕拂區別

- 一、米・酒・塩・醬油其他野菜類、魚鳥肉類都而喰事物買上ケ費ハ内膳課仕拂二付、同課出張之節、精算帳可差出之事

- 一、此度薪・油・蠟燭・紙・筆・墨米桶類水流シ、ティブル・燈・土瓶類其他入夫雇等之費者都而調度課仕拂二付、類帳同課江官員出張之節、

差出之事

φ
一、御湯殿、御馬建、御奥台所
御厠等新規被建、其他畳
表替并堅障子繕ひ幕
帳等出来之費者、内匠課二而
仕拂有之事

・当日の賄料
引用箇所の前半部からは、当日の賄料として上等は三十五錢、下等は十八錢と定められています。その基準は定かではありませんが、各人の役割によって分かれていたことがわかります。

歴史的背景など、考慮すべき点が多いため一概には言えませんが、現代の貨幣価値に直すと上等が約一万円、下等が約五千円で、当日食事代の名目として賃金を受けていたと考えられます。

ちなみに、同史料は大久保氏が出納担当（御巡幸御用諸入費金出納帳簿取締扱）として手控をつけていたからか、巡幸とは直接関係のない金銭出納に関する記述も多くみられます。その中には「千住今人力代舎人町迄十四錢」との記述もあり、これは千住から舎人町まで人力車で行くのに十四錢かかるという意味です。ここから、当時の金銭感覚が想像できるでしょう。

・諸入費の支払いについて
これに続く諸入費仕払区別では、調味料や野菜・鶏肉などの食糧費、雑費・人件費、御湯殿・御厠など行在所の整備費を、それぞれの部署へ請求

すべきかが記されています。ここで言及されている内膳課・調度課・内匠課はいずれも当時宮内省内に設置されていた課であり、御巡幸時の費用が宮内省によって賄われていたことがわかります。このことは、予算の枠組みが御巡幸としてではなく、平時の分類によって行なわれていたと解釈することができ、非常に興味深い事象です。

なお、今回の史料中にみられる〇に棒線を追加した記号（翻刻ではφを代用）は、作成者である大久保氏が確認のために付したものと考えられます。

■出勤控にみる御巡幸に向けた準備
次に、史料後部に記述された出勤控から、準備過程についてみていきます。この史料は、大久保宗平氏が自身の出勤の際に書き留めたものとみられます。

【出勤控（抜粋） 翻刻】
出勤扣 一同出勤
五月十二日 一同出勤
十三日 右同断

（中略）
廿三日
大久保内務省 道路 渡辺 □
御通行 南組 川村
宿調 □□□ 織畑
永野 星野
浅仁 浅香
大久保 浅仁

（中略）
扱所 大久保

（中略）

廿九日

一同

道路

川村

池上

浅香

大久保

渡辺

三十日 一同

三十一日 一同

六月一日 一同

六月二日 御通輦

一同

※□は文字が不明瞭なもの。

出勤控は五月十二日から記載されており、準備を担った千住の町役人が、各日担当の場所へ出勤していたことがわかります。二十三日に記載のある「大久保内務省御通行」とは、御巡幸の先発隊として大久保利通（当時内務卿）が千住宿を通過したことを指しています。また、六月三日にある「御通輦」とは、明治天皇の乗った車の御通行を指し、同日の担当者一同の出勤が確認できます。四週間前から入念に準備し、通行の三日前からは連日全員出勤という徹底ぶりです。

■おわりに
今回まで全三回にわたり、明治九年の東北巡幸の際に、千住宿が行った準備について、当時の史料をもとに解説してきました。

第一回では、昨年の特別展で展示した御用扣の展開部から、御行在所で用意された品々がどのようなものであったかについて述べました。そこでは、使用する炭や井戸の水まで細かく指定されていたことが記されていました。また、今回示した史料で調度課の支払いとなっていたテーブルの領収書も紹介しました。

第二回では、通行する往還の整備について、通行の利便性と、衛生環境の二点を重視した快適な通行を目指していたことについて述べました。

そして今回は、諸入費支払いに関する史料と出勤扣から、巡幸準備に際しての実務的な動きについてみてきました。いずれの回からも、明治新政府の一大事業であった天皇御巡幸を完遂するため、千住の町役人たちが準備に尽力した姿が想像できるでしょう。

東北巡幸については、その行程が記された宮内省発行『東巡録』という史料があります（国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧可能）。これを見ると、皇后との御饒別や三条実美の和歌奉献などを含め、実際に千住に滞在した時間は一時間半ほどであったことが分かります。それを踏まえると、いかに入念に準備していたかがよくわかります。

このように地域に残る史料からは、公的な記録からは見えない地域の実情をみることもできるのです。

（郷土博物館専門員）